



森

千葉県 TEACCH プログラム研究会
2015年5月9日 第77号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県TEACCHプログラム研究会広報部

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS内 TEL 043-227-8557

ホームページ：<http://www5e.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

さらに仲間を増やしていこう —自閉症スペクトラムの人は増えている—

千葉県 TEACCH プログラム研究会代表 長澤隆壽

千葉県 TEACCH プログラム研究会の会員の皆様にとって、自閉症スペクトラムの人が増えているということに心当たりの方は多いと思います。私も街の中などで「あれ！」「おや！」と行動が気になる人によく出会うようになりました。これも単に自閉症スペクトラムについての知識が多少なりとも身についてきたからだと思います。世間一般的にも自閉症スペクトラムについて、マスメディア等で取り上げられるようになり、少しは知れ渡るようになったと思います。これらにより、発見率が高まったことが「増えている」と言われる要因の一つであるとも考えられます。現に学校現場においては、平成14年に実施された調査「普通学級に在籍する自閉症スペクトラムの児童生徒の割合」で6.3%という数値がありましたが10年経った平成24年の同じ調査では6.5%と増加していることの報告がありました。しかし、様々な情報によると、周囲の人の発見する知識が高まっただけでなく、確かに自閉症スペクトラムを保有する人は増加していると言われています。

いずれにしても、これらの現象に対し自閉症スペクトラムの人々の理解者、支援者をさらに増やしていかねばならないと言えるでしょう。私たち千葉県 TEACCH プログラム研究会は本会の目的に立ってこの課題を追求していきたいと考えています。

つきましては、会員の皆様はもとより、多くのお仲間をお誘いの上、当会の事業に積極的に参加していただけることを心から願っています。

本年も安倍先生のお力添えにより、全国から多才な先生方を講師にお招きすることができました。これらの機会を十分ご利用いただき、自閉症スペクトラムの人々が心休まる生活を営めるように支援力を高めていきましょう

平成26年度 第6回連続セミナー

実践報告会

『性教育における取組』

千葉県立我孫子特別支援学校
吉村奈津江先生



『我々は、性に関する情報は、教えてもらわなくとも、自分で調べたり覚えたりして何となく育ってきました。しかし、自閉症スペクトラムの子どもたちは、きちんと教えないことを学ぶことができません。性についての適切な行動を知らないから、問題行動になっていることがあります』とあります。それを頭ごなしに叱ったり、無理やりやめさせようとしたことは、危険で、本人にとっても不本意なことです。』という基本姿勢に立って、性器の露出についての対応の実践例が報告されました。

本人の視点

- ・分かっているか。
- ・感覚的に受け入れられるか。
- ・成長や生活の広がりの変化に応じているか。

「プライベートゾーン」→水着で隠れるところ

「パブリックゾーン」→放課後支援施設や近所の公園等、写真や線画で具体的に「ここだよ」と示す
一つ一つ保護者と確認し、価値観のすり合わせをして、
本人に分かるように予防的に伝えた。

『保護者同士で性について語り合う座談会を設けたり、性教育のスーパーバイザーの教育相談につなげたりする取組のなかで、お子さんの性的な行動を、年相応の発達をしている証として受け止めつつ、だからこそ、「今ならきちんと教えることができる」と確認し合うことができました。さらに、校内の教師間では、性教育に関する勉強会「セクシャリティーサロン」を継続的に行い、「性」をもともともついている人間の欲求として受け止め、それこそが健康に生きていくための性教育であることを、共通理解することができます。』

«コメント»(印旛自閉症協会 清田さん)

自分の子どもにも、性に関する問題行動がありました。家庭では親、学校では教師、時には一緒に通学している友だちにも協力してもらい、2~3年がかりで取り組んだことを覚えています。性に関する問題では、父だけでも、母だけでもどうにもならないことがあります。学校で、全体の場で学ぶことで「性は、特別ではない、普通のことだ」と理解してほしい。「性」が「生きる」ことにつながることを教え、「生きることにつながる性教育」として、これからも進めていってほしいと思います。

『保護者と担任の連携』

千葉県立富里特別支援学校
瀧本裕子先生

本人らしく、元気で多種多様なことを増やしていきたいとの根底にありました。

『特にコミュニケーションにおいて、GPSつきのiPod touchで「見える」「わかる」「伝わる」機能を持ち歩くようになり、頻繁なコミュニケーションすることが増え、一人で過ごす生活しやすくなるように…』などでした。

学校では、小学部から中学部子ども自身が受け容れられるのです。そこで、母親から具体的な担任は、それをもとに個別の指

<連携のポイント>

- ・保護者の立場から；
保護者と担任と一緒に考えていくために、ニーズを具現化する
- ・担任の立場から；
保護者のニーズを受けて、課題と一緒に考える中で、学校ではできる」という方法を提案する
- ・両者が口を揃えて話されると考え、取り組んでいくことができ、一緒に喜ぶことがで意欲に繋がっていくのだ』とい

«コメント»(八日市場特別支

TEACHでは、保護者をはじめとする保護者の方々が、このように保護者の方々と一緒に、お子さんはとても喜んでいます。瀧本さんと清田先生の事例の例ですが、なかなかうまく伝わらないことがあります。保護者の方は、あきらめずに少しずつ努力してほしいと思います。

2月21日（土）平成26年度の連続セミナーを締めくくる実践報告会が行われました。

毎回のセミナーの学びを活かし、それぞれの場で実践した結果や成果を4名の会員からご報告いただきました。一人一人のアセスメントに基づいた構造化。ご本人が分かる形でより具体的に伝えること、保護者と学校、教員間の協働・・ご本人を取り巻く人々が手を取り合って環境を作り環境を作っていくことがいかに大切であるかを改めて感じることができた実践でした。（岡村絵美）

した取組』

校
子さん
二子子

様な経験をしながら、一人ででき
う、母としての思いが本実践の

については、母でなくても伝わる
oneを活用しました。

ことが実感できたので、本人がい
に使うようになり、自分からコミ
言葉が増えました。また、
せる時間が増えてくると、「もっと
考えるようになりました。」とのこ

に進学するときに、環境の変化を
かどうか、不安が大きかったそ
なニーズを、詳細に担任に伝え、
導計画を作成したのだそうです。

今できることを優先して取り組
体的にあげる。

題は、小、どのように教えるかを
実施が困難な場合でも「これなら
る。
たことは、『保護者と担任とが一緒
、子どもの成長と一緒に感じるこ
き、さらに、次なるステップへの
うことでした。

支援学校 田中先生)
と支援者の協働をとても大切にし
と学校が一緒に考えて取り組んで
させだと思います。
は、とてもうまくいっている連携
わからない場合もあると思います。
伝え続けて欲しいと思います。教
である」ということを常に忘れず



『スケジュールを活用した暮らしの充実』

あしたば中野学園
西村克也さん



いつもとは違う状況に戸惑いが大きい利用者さんが、周囲のことに気を取られずにスムーズに移動し、活動を進められることを目指す取組をご報告いただきました。

『ご本人がスムーズに行動できるために、本人が受け止めやすく、理解できる形式のスケジュールを用いる必要があったので、PEP-Rでアセスメントを行ないました。目で見る力が強く、色に強いこと、マッチングが得意という結果を活かして、持ち歩き型のスケジュールブックで、色マッチングを利用し、移動先にあるカードとマッチングさせるスタイルを取りました。

しかし、職員が促さないとスケジュールを見に行かないということがあったので、ご本人が積極的にスケジュールを活用するために、トランジッショングードを導入し、各場面の切り替えの時に、職員がトランジッショングードを渡すことで、スケジュールを見るきっかけを作りました。

また、支援者側の思いから、スケジュールブックに表紙をつけてみたり、スケジュールブック置き場を設けてみたりしたところ、本人にとっては理解しづらかったり、使いづらさがあったりしたので、ご本人にとってより形を見極めることの大切さを実感しました。』

本実践を通して、環境の調整と、個々に着目したアプローチがその人の暮らしやすさにつながることがわかつてきたとのことでした。ご本人の生活がこれを基盤に発展させられるように、もっと内容の濃い充実したものにつながるようにしていきたい…今回は、そのスタートでした。

«コメント» (CAS副センター長 田熊さん)

活動に合わせて動くことができないけど、動かなくてはならないことがわかっている。不安が高いために動きがスムーズでなかった利用者さんが、ご本人の特性に合ったスケジュールを活用することで、自信たっぷりに自分で移動する姿が見られました。

単に一人でできるということだけではなく、自分のペースで自分の生活を送っていくことが自信につながり、その自信が生活の満足感になる。生活の満足・充実・自尊心が基本にあることが、実現できた実践であったと思います。

好評連載！

ティータイム



千葉県TEACCHプログラム研究会 ディレクター 安倍陽子

寒い日々がようやく過ぎ去り、本格的な春の訪れを迎えました。花々が一斉に咲き始めて新緑と調和し、風が薫る美しい季節になりました。今年もこの時期にT研を始められることを嬉しく思います。会員の皆様には、ご参加を心から感謝を申し上げます。

今年、私たちのT研は13年目に入りました。まずは、今年度のT研のプログラムのご紹介を。例年通り、5回の講演会（前半は基礎編、後半は実践・応用編）と2月の最終回は、講演を聴いた方々からの実践発表会を行います。今年は、なんと言っても、9月に長野から学校の先生を、11月に函館から成人施設職員の方を、12月には当事者の方をお呼びし、講演の更なる充実化を計り、ASD（自閉症スペクトラム）の方たちの生涯的な支援を学びたいと思います。実践セミナーは昨年に引き続き、評価ツールである青年・成人向けTTAP講習は6月に、適応行動を評価するヴァインランドⅡは10月に、そして協力児・者がご参加下さり、グループで学び合う2デイズの自閉症療育セミナーは7月に行います。多彩なプログラムから、日々の生活の中で、ASD支援にお役立ていただければ幸いに思います。

さて、この“ティータイム”的なコーナーは、千葉のT研のことを中心に、個人的なことも書かせていただいている。昨年度、私のASDの理解を進めてくれたのは、職場で家族向け講演会や職員研修にお呼びした当事者の方からのお話でした。以前、このT研でも、テンプル・グランディン氏の自伝のTV映画を映写し解説をしたり、小道モコさんからお話を伺つたりしましたね。今回、ご本人の見方や感じ方をお聞きすることにより、よりセンターで出会う子どもたち（年齢や知的水準によらない）の見方や感じ方に寄り添えるよう思えたからです。彼は、大学院で薬学博士号を取得し、製薬会社で働いていましたが、ASDの2次障害から退職し、今は当事者支援を行っています。“寄り添いやSST訓練などよりも環境保障を考えて欲しい”“感覚刺激に対するコーピング（ストレスに対処する）行動を認めて欲しい”等のお話は、大変参考になり、新たに学ばせていただきました。会員の皆さんにも是非聞いていただきたい…と思い、12月にご本人をお呼びすることにしました。以前、NHKで放映されたテンプル・グランディン氏に関する番組にゲスト出演されていましたので、ご存知の方もいらっしゃるかもしれませんね。乞うご期待です。

次は、本のご紹介で、すばる舎から佐々木正美先生の新刊として出版された、“発達障害の子に「ちゃんと伝わる」言葉がけ”を。この本は、私も協力者になっているのですが、佐々木先生からのメッセージの他、療育センターで、個別・グループ指導や家族勉強会でお目にかかるお母さんたち4人が、子育てを通して、いかに工夫してきたのかが書かれています。お2人は、お子さんが中学生になりました。お1人は、兄弟児のケースです。タイトルは、“言葉がけ”ですが、実は内容は、他に言葉に代わる視覚支援や工夫の必要性が書かれしており、特に幼児期、学齢期のお子さんをお持ちのご家族は参考になるかと思います。学校の先生に、ご自分の子どものことをどのように伝えてきたのかなど、個人的なことも書かれています。親御さんの子どもへの深い愛情も伝わってきます。

今年度も総会の後に、佐々木先生から千葉のT研がスタートし、お話を伺えますことを本当に幸せに思います。皆様、今年度もどうぞよろしくお願ひ致します。

～～～ 平成27年度 TEACCH プログラム研究会 第2回連続セミナーのお知らせ ～～～

期日； 平成27年7月18日（土）13：30～16：30（受付13：00）

場所； 千葉市文化センター セミナー室

（中央区中央2-5-1 千葉中央ツインタワー2号館）

演題； 『特性に基づいた視覚支援』（仮題）

講師； 安倍 陽子氏（横浜市東部地域療育センター 臨床心理士）

編集後記：自閉症の支援をしている人は、自分の伝えたことが「ちゃんと伝わったかどうか。」を必ず確かめるようにしたいですね。学校では、高等部だからという理由で、漢字が使われている教室があります。漢字で伝わる人は漢字を使えばよいのですが、漢字を知らない人、文字を持たない人に何を持って伝えているのでしょうか。佐々木正美先生の新刊本、私も是非読ませていただきたいと思っています。今年もたくさん学んで、自閉症の方のよりよい隣人になりたいものです。（田中律子）